TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集
多様化する英語の授業

巻頭エッセイ
腹話術で英語が上達！ ..... いっこく堂 01

特集
英語教育の多様化に対応するために ..... 高橋貞雄 02
少人数指導における諸課題 ..... 重松　靖 06
Team-Teachingへの新たな期待 ..... 杉本　薫 09
学ぶ喜びを感じる選択授業―個に応じた言語活動を通して― ..... 関口和弘 11

連載
英語教師のための基礎講座　「音読からStory Tellingへ」の巻 ..... 高梨庸雄 13
評価クリニック　「観察」再考 ..... 根岸雅史 15
授業レポート　教科書を創造的に活用するために[3] ..... 野澤重典 17
小学校英語Just Now
コミュニケーションへの態度を育てる！―担任だからこそできる英語活動― ..... 大澤克代 20
単語の文化的意味 61　orange ..... 森住　衛 22
Essay
Intercultural communicative competence［3］ ..... Lynne Parmenter 23

AROUND THE WORLD アメリカは英語の国でしょう？[3] ..... 山本　昭・山本文子 表紙裏
表紙写真について　Old Etonians ..... 根岸雅史 表紙裏

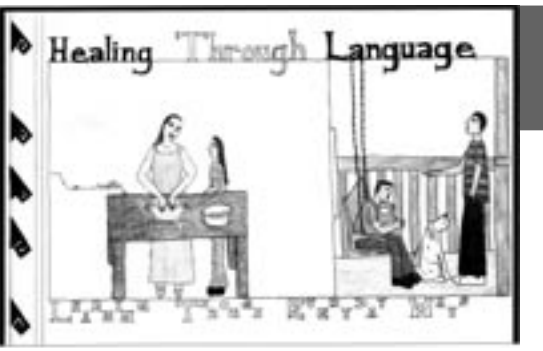
Vol.3
FALL 2003
SANSEIDO

AROUND THE WORLD 3

アメリカは英語の国でしょう？

石鹸と言葉

山本 昭　Yamamoto Akira　（カンザス大学教授）
山本文子　Yamamoto Fumiko　（カンザス大学名誉教授）



Artist: Diana Ortiz (age 14), Santo Domingo Pueblo, New Mexico, USA©2002
Courtesy of Indigenous Language Institute

「アイヴォリーソープ（Ivory soap）ってあるでしょう？ 私はあの特種な臭いが大嫌いなのよ。アイヴォリーと聞いただけで吐き気がするわ」とネイティヴ・アメリカン（以下 NA）のワラパイ族の友人（50 代）が言う。それは，小学校時代に，インディアン管理局（Bureau of Indian Affairs，略 BIA）によって強制的に全寮制の学校に入れられたときの経験からだ。それらの政府直轄の学校では，子どもたちは自分の母語を話すことを禁じられ，伝統的な長髪を刈られ，白人のシャツ，スカートやズボン，靴をはかされた。一言でも母語を話せば，ものさしで手をひっぱたかれ，アイヴォリーの石鹸で口の中をうがいすることで，「汚い言葉」を洗い流させられた。NA の人々の歴史の一こまである。

インディアン管理局局長 J.D.K. Atkins は，1887 年に次のような英語中心の発想を公言した：

「…真のアメリカ人であるならば，我が国の憲法，法律，そして制度が他のどの国のそれよりも優れていることを知っており，これらは我が国の言葉，すなわち英語を通して初めて国民全般に根強く行き渡ることを周知しているはずだ。…無数の民族と人種の間に共同意識，一体感を確立するのには，まず 1 つの同じ言葉を話すということがあって初めて可能になる」

そして Atkins は，次のように結論する：

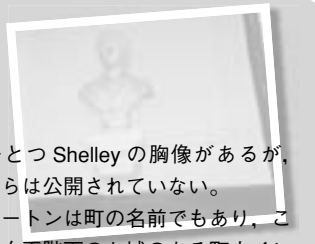
「インディアンの教育には彼らの言葉は有害無益であり，文明化の目的にはまさに危険といってよい。したがって保留地内の学校では，英語以外の言語を使うことは許されない」

アメリカ先住民の言語に対するこのような否定的な態度は，法律化こそされなかったが，一般国民の間に根深く不文律として存在している。そして，石鹸の臭いが身体にまつわりつくように，自分たちの言語への否定的な思いが NA の人々の生理，精神に絡みついているが，それから抜け出そうとしている人たちが増えてきている。この外的，内的な反言語の態度と闘いながら，自分たちの言語を守り，促進させようとしている NA のため，遅まきながら 1990 年 10 月，前ブッシュ大統領の署名で，先住民の言語がアメリカ史上初めて生きた言語として認められた。“Native American Languages Act” (Public Law 101-477) がそれである。次回は，その意味と，NA の人たちが努力していることについて述べよう。

表紙写真について

Old Etonians

根岸 雅史　Negishi Masashi　（東京外国語大学教授）



この写真は，英国の名門パブリック・スクール，イートン校 (Eton College) にて撮られたものである。英国には数多くの伝統校があるが，中でもイートン校は 1440 年の創立であり，500 年を超える歴史は際立っている。

その歴史と伝統ゆえ，イートン校には，錚々たる卒業生がいるわけだが，その卒業生を Old Etonians（略して，OEs）と呼んでいる。この Old Etonians には，歴代総理大臣が 19 名，また，作家には *Animal Farm* でおなじみの George Orwell，経済学者の John Maynard Keynes などなど，枚挙にいとまがない。

この写真の胸像の主は，その Old Etonians のひとりで，英国ロマン派の詩人である Percy Bysshe Shelley(1792-1822) である。胸像の下の木の部分には，何か文字が彫ってあるのが見える。この文字についてイートン校に問い合わせたところ，以前には，学生が自分の名前をパネルに彫る伝統があり，これもそのひとつであるとのことであった。実は，イートンにはこのほかにもうひとつ Shelley の胸像があるが，こちらは公開されていない。

イートンは町の名前でもあり，これは女王陛下のお城のある町ウインザーのとなり町である。ウインザー城に行った折にでも，少し足を延ばして，この伝統校を訪ねてみてはどうだろうか。ウインザーからイートンに行くには，テムズ川にかかる小さな橋を渡る必要があるが，そのあたりでアフタヌーン・ティーをしてもよい。

巻頭エッセイ

腹話術で英語が上達！

いっこく堂　Ikkokudou

Opening Essay

ろくに日常の英会話もできない私が，英語習得法なんて大それたことを言えるような立場ではありません。しかし，何かしらヒントになるかもしれないということで，私の経験をご紹介いたします。

3年前の夏，ラスベガスで世界腹話術フェスティバルが開催されました。世界各国の腹話術師が一堂に会する大イベントです。私は光栄にも，そのオープニングパフォーマーに抜擢されたのです。と，そこまでなら喜ばしいだけの話なのですが，一番肝心なことは，当の本人である私が，全く英語が話せないという点にありました。

フェスティバルへの出演は，あまりにも突然に決まりました。40日前に決定し，ネタを英訳し終えたのが28日前だったのです。かなり無謀な挑戦でしたが，こんなチャンスはなかなか来ないだろうということで，参加を決断したのです。

さあ，それからが大変……。ただ普段やっている日本語を英訳するだけではなく，世界で通用する，特にアメリカ人にウケるネタに作り変える必要がありました。そこで，今や「英語でしゃべらナイト」（NHK）などでおなじみの，パトリック・ハーランに相談しつつ，発音も教えてもらい，作り上げていきました。

英語の学習法としては疑問を抱きつつも，とにかく丸暗記に取り組みました。すると，不思議なことに，2週間を過ぎたころから，自然に言葉が流れ出るようになってきたのです。今思うと，それは歌を覚える時の感覚に似ています。細かい意味までは理解していませんでしたが，リズムで覚えました。その時に必要だったのは，とにかく覚えることだったので，それはそれでよかったのかもしれません。

とは言いましても，私の場合，「唇を動かさずに発音しなければならない」という，もうひとつの大きな作業がある訳です。しかし意外なことに，腹話術の舌の動かし方と，英語の発音の仕方には共通点があったのです。例えば［th］の時の，上下の歯で軽く舌を噛んで発声する音や，上の歯で下唇を軽く噛む［f］や［v］などは，日本語で腹話術をする発声法にもあるのです。ですから，腹話術を始めてからの方が，英語の発音がよくなったように感じられます。

フェスティバルの結果ですが，……大喝采を受けました。とは言っても，英語力への評価ではなく，腹話術の技術への拍手でした。でも，本当にお客さんにはすんなり受け入れてもらえて，たとえ丸暗記でも，無理して参加してよかったと思っています。

あれから3年，今真剣に英語に取り組んでいます。今年の1月に，LAとデトロイトで公演しましたし，この7月にも，ニューヨーク，サンディエゴ，再びLAに行きました。

まだまだ，丸暗記をようやく一歩踏み出したといった実力ですが，夢は，アメリカ人相手に「アドリブでウケをとる」ことです。道のりは遠くても，実戦でつかめるものは大きいはずです。皆さんも，どんどん実戦にチャレンジしてみてはいかがですか。

いっこくどう
沖縄県出身。劇団民藝を経て腹話術師に転向。『文化庁芸術祭新人賞』などを受賞。今夏は全米ツアーで大成功をおさめる。新作「人形アラ？モード」ほか，ビデオ・DVD作品多数。現在「ボイスイリュージョンツアー2003」を全国27カ所で展開中。

特集 多様化する英語の授業

英語教育の多様化に対応するために

高橋貞雄
（玉川大学教授）

はじめに

教育界全体を通してしばらく前はゆとりの教育が合言葉のように使われた。そして最近は基礎学力が問題にされている。さらにここにきて教育の多様化現象が目立つようになってきた。背景には，各学校や自治体が独自性や特色を出すことによって生き残りをかけざるをえない状況が生まれてきたことがあると考えられる。多様化には様々な力学と様々な側面があるが，この多様化が英語教育にどのような影響を及ぼしているのか，またそれに対してどのように対応すればよいのかを，本稿で考えてみることにする。

1. 制度の多様化

まず教育の多様化をもたらす要因を制度面からみてみたい。教育にもっとも影響を与える要因は学習指導要領である。学習指導要領の総則において，各学校は創意工夫をして特色のある教育活動を進めること，また個性を生かす教育の充実を図ること，といった記述がみられる。その意味では，学習指導要領の規制が緩和されたことによって，カリキュラムや授業形態の多様化に拍車がかかったと言えるだろう。多様化を制度的な面からみると，以下のような現象がある。

(1) 一貫教育と6・3・3制の見直し

従来から，私学では小中の一貫や中高の一貫が存在した。ここにきて，公立学校においても一貫校が生まれてきている。そしてその一貫校の数は増加の傾向を見せている。一貫教育にともない，従来から当然のように考えられていた6・3・3制が例えば4・4・4制に転換される可能性が生じてきた。このようになると，英語教育にも少なからず影響を与えることになる。小学校においても国際理解教育の一環として英語（英会話）が教えられるようになった。現在，英語を何らかの形で教えている小学校は6割程度だと言われているが，その数は年々増加している。一方で，小学校と中学校のカリキュラムの一貫や指導の一貫はほとんど行われていない，と言っても過言ではない。その点,学校自体が一貫になれば，英語教育も一貫の枠のなかで行うことができるようになるだろうし，少なくとも効率面ではかなりの成果をあげることになるだろう。もちろん，小学校や中学校がそれぞれの独自性を持つことにはそれなりの意義がある。

(2) 3学期制，試験制度，評価制度の見直し

このところいくつかの自治体で3学期制を2学期制に変更する動きがある。いくつかの理由があるが，その1つは「基礎学力」を保証するための時間数の確保であるという。その関連で，従来多くの学校では中間試験と学期末試験を年5回行ってきたが，中間試験を廃止するところが出てきた。その分，授業時間数が確保できることになる。

これには評価制度の見直しも少なからず影響している。絶対評価では，従来からあるペーパーテストだけでなく，観察，ポートフォリオ，インタビューなどの多様な評価法を取り入れることが求められている。そうなると，なにも試験期間を確保して試験を行う必要はないわけである。また，評価方法が多様になれば，それは当然，授業の多様化，指導法の多様化へとつながっていく。

2. 授業形態の多様化

ここでは，現在行われているいくつかの授業形態

を取り上げ，その特徴と考えておくべき点を挙げてみたい。

(1) 習熟度別授業

教師が同じように教えたとしても，生徒が同じように学ぶとは限らない。授業外の学習量も生徒によって異なる。そこで，生徒の習熟の度合いに応じて授業を行う方が効果的だ，という考えが生まれる。横並び教育，または「平等」教育になじんできた日本の学校風土においてはレベル別授業には反対が多かった。しかし，個に応じた指導が求められるようになれば，習熟度別授業は1つの選択肢である。それによって，いわゆるスローラーナーには基礎・基本を，上級の生徒には発展的な学習を保証することができる。また，同じレベルの学習者同士のよい意味での競争を生むことが期待される。しかし，習熟度別授業には反対意見もある。そもそも言語が使用される状況には，様々な要素が混在している。そこでレベルの違いがあるからこそ，教え合いや学び合いが生まれる，という考えが生まれる。英語のようなコミュニケーションやコミュニティを前提にする学習では，授業の内容やクラスの規模に応じて，レベル別授業とミックス授業とを併用することを考えるのも一案である。

(2) 少人数制授業

もともと外国語の授業では，40人学級には無理があると言われる。世界のクラス規模の調査でも40人で外国語の授業を行っている国はまれである。特にコミュニケーション活動を主体とする授業では20人や25人程度が望ましいのではないだろうか。もちろん，少人数制授業を行うためには予算的な裏づけも必要である。ここ数年，少人数制の授業形態を推進する自治体が増えてきたのは望ましいことである。教育の目的を達成するために予算の手当てをするのはある意味当然のこととして，一方で，子供の数が減少してきたこと，子供が多様化して40人では目が行き届かなくなってきた，といった副次的な要因も少人数制授業の後押しをしていると聞く。

少人数制授業は，分割授業といった形態をとることもある。たとえば，通常はクラス単位で授業を行い，週に1度クラスを半分にして授業を行う，といったやり方である。この場合には，習熟度別に2分し，それぞれの進度に応じた指導を行うとか，コミュニケーション活動主体の授業を行うといった対応が可能になる。

(3) T-T授業

従来，T-T授業というのは，日本人教師とALTのティーム・ティーチングが主流だった。ここにきて，それとは別に日本人同士の授業が多く見られるようになってきた。この場合，専任教員同士で行うケースと専任教員に講師や大学生などのボランティアが加わるケースが見られる。いずれの場合も，個々の生徒の理解を促進したり，コミュニケーション活動を活性化したりする上で大変有効である。

T-T授業で大事なことは，2人の教員が活動の目的，指導方法，役割分担などに関してよく話し合い，連携が取れていることである。たとえば，説明中心の授業で1人でできる授業であれば，何も2人が教室にいる必要はない。簡単に言えば，T-Tだからできること，T-Tでなければできないことを，T-Tでやる計画を立てるということである。T-T授業でもう1つ可能性があるのは，評価の面である。たとえば，評価の方法の1つとして観察法があるが，T-Tの授業であれば無理なく行える可能性が生じる。

(4) 選択授業

新指導要領の導入により，選択教科にあてる授業が増加した。本来，選択の授業とは，生徒一人ひとりがそれぞれの興味関心，また自由意思により選択するためのものである。しかし，選択の授業としてどれだけのレパートリーを各学校が用意できるかについては運用上限度がある。そこで，かなり多くの学校が週3時間の英語の授業を補う1つの方法として，選択教科を利用しているようである。

もちろん英語以外の学習も選択教科で行われる。しかし，こと英語に限って言えば，選択教科で行う授業にはかなり豊かな可能性があるだろう。1つは，習熟度別の授業を展開することである。レベルの高い生徒にはコミュニケーション活動など発展的な学習を保証する。一方，進度の遅い生徒には基礎・基本の定着を図るための授業を行う。2つめは，目的別，関心別の授業を展開することである。例えば，多読のための授業，進学のための授業，会話のための授業，あるいは検定試験のための授業などを行う。

3つめは，普段の授業では行えないプロジェクト方式の授業を展開することである。たとえば，英字新聞作り，児童文学の翻訳，Eメールやインターネットを利用した海外の学校との共同プロジェクトなどである。

(5) IT活用授業

現在は英語の教科書の付属教材として，ITの時代にふさわしい教材も用意されるようになった。英語の学習はもはや教室だけで行うものではなく，anytime, anywhereの時代に突入しようとしている。教室で教科書準拠のビデオを活用するのはもちろん，メディア教室で学習用のソフトを使って個別学習をするケースも増えてきている。Eメールやインターネットを使った学習も可能である。大事なことは，それぞれの特徴を知り，目的に応じて使い分けることである。普通の教室での手作りの授業にもよさはあるのである。

3. 指導法の多様化

現在は教授法不在の時代だと言われる。かつて一世を風靡したオーディオ・リンガル教授法のようなカリスマはもはや存在しない。ここでは，指導法をいくつかの観点から分析し，今後のヒントを得る手がかりにしたい。ポイントは優劣をつけることではなく，特徴を知ることである。

(1) 教師中心から学習者中心へ

これはいわゆるteacherからlearnerへ，teachingからlearningへの振り子のゆれを言っている。教授法で言えば，例えば文法訳読教授法からコミュニカティブ・ティーチングへの移行である。言い換えれば，従来の教え込む授業から使わせる授業スタイルへと変わってきたということである。この重点の移行はある意味で当然のことである。授業は学習者のためにあり，学ぶのは学習者だからである。

(2) 一斉授業からグループ学習，個別学習へ

従来は，授業というものは教師と生徒が対面し，知識が教師から生徒へ一方的に流れていくものだと思われていた。しかし，コミュニカティブ・アプローチやタスク型の授業が登場し，英語の授業の目的がコミュニケーション中心になると，ペアワークやグループ学習が好まれるようになった。とは言え，ペアワークやグループ学習が万能というわけではない。要はそれぞれの指導形態の特徴を知ることである。一斉授業のメリットは，生徒の安心感が保証される点と，教師の指導や説明が一度で済むために費用効果が高いことである。デメリットは，生徒一人ひとりの発言の機会が非常に少ないということである。ペアワークのメリットは，発言の機会が増加すること，ペアごとの個別指導が可能になることである。デメリットは，ときにペアの組み合わせが問題になったり，本来やるべきことをやらずに遊んでしまうことがあることなどである。グループ学習のメリットは，コミュニティ感覚が育ち，それに伴って自立学習が促進されることである。デメリットは，グループ内の役割が固定し一部の生徒だけが話したり，騒々しくなったりすることである。教師は，このようなそれぞれの指導形態の特徴を理解した上で，授業計画を立てなければならない。

(3) 授業展開の多様化

授業の方法は教師の数だけあると言っても過言ではない。しかし，授業展開を大雑把に2分すると，帰納的展開と演繹的展開とに分けられるだろう。前者は，様々な言語活動を行いながら，ルールを発見的に導き出していくアプローチである。後者は，最初にルール（文法・文型）を教えて，それをもとに活動を展開するアプローチである。一般にインプット理論を提唱する人たちは帰納的なアプローチを好む。これはある程度十分な時間が確保できた時には有効な，あるいは望ましいアプローチだと思われるが，週3時間程度の授業の場合にどう働くかは検証の必要があろう。

(4) コンテンツ型授業・スキル型授業

これは，授業の中身や重点の置き方に関連している。コンテンツ型授業とは，教える内容（題材）を重視して，それを軸にして言語の学習をする方法である。この方法は生徒の学習動機を高め，定着を促す上で有効だとされている。スキル型授業とは，例えば「情報を尋ねる」などのコミュニケーション・スキルに焦点をあてて授業を行う方法である。この方法は，いわば即効薬的な特徴を持っていると言える。現在，コンテンツ型授業が注目を浴びているが，これはカナダなどで一般的に見られる，理科や歴史な

どの科目をフランス語で学ぶといった「イマージョン教育」にヒントを得たアプローチである。イマージョン教育は日本でも徐々に広がりを見せ始めている。スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールなどでやろうとしていることも一種のイマージョンである。

(5) 統合型授業・焦点型授業

これは，聞く・話す・読む・書く，の4技能を授業の中でどのように展開するかについて言う。統合型授業とは，1時間の授業の中に4技能にかかわる活動を満遍なく取り込んでいく授業である。読み物の概要を書いたり,書いたものを発表したりする，いわゆるクロス・スキル型の授業も一種の統合型授業である。一方，1つの技能に焦点をあてて行う授業展開もある。たとえば,リスニングに焦点をあて，概要の聞き方，詳細の聞き方，といったリスニング・スキルを身に付けるための授業である。一般的には，統合型を基本とし，それに焦点型を組み合わせていくということになろう。組み合わせることにより，授業にメリハリがつくという副次的効果もある。

(6) 指導技術の充実と多様化

最近は，SLA（第二言語習得研究）の成果とともに，指導法の研究が進み，様々なアイディアが生まれてきている。その1つに，ストラテジー・トレーニングの考え方がある。すぐれた言語学習者が採用するストラテジー (learning strategies) を研究して，それを他の学習者にトレーニングしようということである。たとえば，単語の覚え方，未知語の類推の仕方，コミュニケーションの続け方などを直接教えるわけである。もう1つは，マルチ知能 (Multiple Intelligences) の応用である。一人ひとりは音楽的知能，数学的知能，対人的知能などの得意な分野を持っている。教師は，様々な知能に関連する活動を考えて授業に取り込んでいく。そうすることで，生徒一人ひとりに対して動機付けを与え，学習を促進しようとするわけである。現在，生徒の情意面に対する配慮が求められるなど，個に対する指導が授業の課題になっている。その意味で，マルチ知能を応用した授業は解決策の1つとしての可能性を示している。

4. 反多様化現象

様々な面から多様化を見てきたが，多様化に反した動きが1つみられる。それは英語化現象である。この現象は，いろいろなところで顕在化している。たとえば，学習指導要領の扱いである。従来は，外国語は選択科目であったが，現行の指導要領からは必修科目の扱いになった。しかも，原則的に英語を履修させることになった。また，外国語（英語）の指導目標として「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」と明記されている。つまり，目標が「使える能力」に限定されてきているのである。この傾向は，平成14年に「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」が出されてから一層拍車がかかってきた，と言えよう。

この考えは，今までの英語教育があまりにも社会のニーズに応えてこなかったという反省，または自戒に立脚している。確かに英語は1つの言語としてコミュニケーションの道具としての働きを持っているわけであるから,「使う」ということを目標に掲げることに間違いはない。しかしここで，英語教育の目標も多様であっていい，という考えを提案しておきたい。英語教育を通してできること，またやらなければならないことはたくさんある。1つは，ことばの発達を促し，考える力を養成することである。1つは，異文化理解を通して子どもたちの世界観を広げてやることである。さらに1つは，母語や外国語の学習を通して一人ひとりのアイデンティティの構築に手を貸してあげることである。英語教育の目標を「使う」ということに狭めてしまうと，教育としての様々な可能性が見えなくなってしまう恐れがある。

おわりに

護送船団方式の英語教育はもはや通用しない。これがこのエッセイのまとめである。これからは，皆がやっているようにやればよい，誰かの指示に従っていれば間違いはない，といった他力本願的な考えは捨てなければならない。授業が多様化するということは，多くの選択肢の中から適切な選択をしていかなければならない，ということである。ここで改めて，それぞれの授業観や授業スタイルについて検証していただければと思う。

特集 多様化する英語の授業

少人数指導における諸課題

重松 靖
（東京都国分寺市立第二中学校）

はじめに

「ゆとりのある教育活動を展開する中で，基礎・基本の確実な定着を図り，個性を生かす教育を充実すること」を基本方針の１つとして学習指導要領が改訂され２年目を迎えた。

また，文部科学省は，生徒一人ひとりのよさや可能性を伸ばし，個性を生かす教育の一層の充実を図るため，少人数指導や習熟度別指導を行うことを可能とする第７次教職員定数改善計画を平成 13 年度から推進し，きめ細かな指導の実現を進めている。

東京都においては，平成 14 年度，何らかの形で少人数授業等，きめ細やかな指導を実施している中学校は 652 校中 543 校あり，さらに必修教科において習熟度の程度に応じた指導を実施している学校は 320 校にのぼる。また文科省の調べでは，本年度，必修教科の授業において習熟の程度に応じた指導を実施している中学校は 67％であるという。しかし，指導体制や指導方法については，各学校によって異なり，それぞれが試行錯誤を繰り返しながら実践しているのが現状である。

各学校が抱えている問題

多くの学校が抱えている問題点は次のようにまとめることができる。

1　教材の不足

習熟の程度に応じた小集団ごとの教材が開発されていないため，個に応じた指導を充実することができない。

2　打ち合わせ時間の不足

学習進度や評価を一致させるために，教師間の打ち合わせの時間が増加し，教師は多忙になっている。

3　時間割編成が困難

２～３人の教師が同じ時間に指導をすることになるので，時間割を組むのが大変である。特に非常勤講師が入る場合には時間が限定されるため他の教師への負担が大きくなることがある。

4　教室や教材・教具の不足

CD やピクチャーカード等の補助教材を複数用意しなければならない。また，規模の大きな学校では余裕教室や机，椅子が不足し，悪条件の中で学習しなければならないことも多い。

5　生活指導上の問題

教師の意図どおりの学習集団が編制できず，コースによっては，学習意欲の低い生徒が多く集まり，1 時間の授業が生活指導に追われてしまう。

問題克服のために

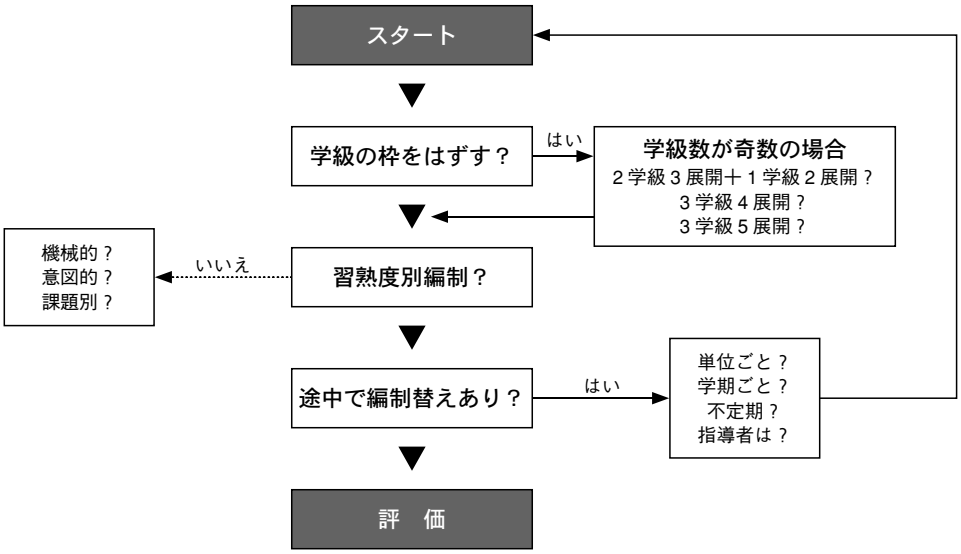
1　目的に応じた学習集団の編制

学習集団の編制は一般的に次ページの図のようにまとめることができる。

大切なことは，目的に応じた柔軟な編成をすることではないだろうか。英語の場合，習熟度別指導が常によいとは言いがたい。教師と生徒との interaction を通して新出事項を導入するときには英語の得意な生徒の力が大きな助けにはなるが，英語は苦手でも明るく活発な生徒がコミュニケーション活動を盛り上げてくれることも多い。さまざまなレベルの生徒が混在することにも意義があるのである。

なお，習熟の程度に応じたクラス編制をする場合には，ペーパーテストでの文法や言語に関する知識理解だけでコース分けをすべきではない。例えば，*NEW CROWN* の LET'S TALK のように speaking 主体の単元では，話そうという意欲や発音，創意工

（図）



夫など，総合的な speaking の力に応じて学習集団を編制することがあってもよい。

大切なことは，年間指導計画をしっかり立て，それぞれの単元において生徒にどのような力を付けさせたいのか，そのためにはどのような学習集団を編制するのが最も効果的なのかを十分に吟味し，生徒に対するガイダンスを強化することだろう。

2　指導方法の工夫

人数が少なければ効果があると短絡的に考えてはいけない。確かに，生徒一人ひとりに目が行き届き，英語の発話量も増えることは事実であるが，機械的なドリルを繰り返すだけでは，実践的なコミュニケーション能力を身に付けることはできない。40人近いクラスではなかなかできなかった指導方法を積極的に取り入れることが大きな効果を生むはずである。例えば，場面を重視したロールプレイングやスキット，dialogue を narrative に書き換える writing，聞いた内容を実際に行動させてみたり，自分のことばで言い換え，他の生徒に伝える活動等々，これまで一人ひとりに十分な時間がかけられないために敬遠していた活動を積極的に導入したい。

学習形態にも工夫が必要である。ある学校では，常に生徒が黒板に向かって座るのではなく，指導内容に応じて椅子を向かい合わせにしたり，全体を円形や半円形にするなどして生徒の心理的圧迫感を和らげ，interaction の量を増やすという実践をしている。

基礎コースでは主に日本語を使って指導し，応用・発展コースではできるだけ英語を使う，というようにコースによって使用言語を変えることもできる。

個に応じた指導とは，指導形態，教材，指導方法を工夫することによって初めて効果をあげるということを忘れてはならない。

3　指導内容の工夫

授業の主たる教材は教科書であるが，どこまで指導するのかによってハードルの高さは違ってくる。

例えば，基礎コースでは listening, speaking を中心に基本文の理解と簡単な自己表現ができ，本文の概要をつかむことができるようにし，発展・応用コースは，例えば，speaking ではさまざまな場面を想定しそれぞれの場面にふさわしい表現をさせてみたり，新出語彙についても他の用法にまで触れたりするなど，生徒の実態に応じて発展的内容にまで触れるようにする。

基礎コースでは，主に音声を重視した活動を展開し，reading や writing 等文字を介する活動は必要最小限にとどめ，生徒達に自信を持たせ，学習意欲を喚起させるようにしたい。

4　評価について

評価は学習指導要領の目標と内容及び指導要録の

観点別学習状況を基に行うものである。したがって，習熟の程度に応じた指導においても評価規準は同じでなければならない。

例えば，「will を使って夏休みの予定を言うことができる」という評価規準を設定したならば，どのコースにいても，多少の誤りはあっても，will を用いて夏休みの予定を言うことができ，意味が理解できるものであれば「B」と評価すべきであるし，英語の質が高く，情報量も多いと判断すれば「A」と評価する。

また，「本文の概要を読み取ることができる」という評価規準であれば，基礎コースでは日本語，発展コースでは主に英語を使って理解度を確認しようとも，規準を満たしていれば「B」以上と判断すべきであるし，行間までしっかり読み取れていると判断できれば「A」と評価することもあるだろう。

発展的な学習をすれば「A」，しなければ「B」と判断すべきではない。

言うまでもなく，指導と評価は一体でなくてはならない。指導していないものは評価できないし，指導したものは正しく評価しなければならない。これまで speaking の評価は人数が多すぎるとか，評価が主観的になりがちであるといった理由で敬遠されがちであったが，1 クラス当たりの人数が少なく，絶対評価が導入された今，speaking の評価を積極的に取り入れるべきである。

教師と生徒（個人 or グループ）とのインタビュー・テストや，小型のテープレコーダーを生徒に持たせ教師の質問や指示にしたがって英語を録音させ，後で評価するといったこともできる。また，評価規準を「意欲・態度」「意味が通じたか」などのように限定すれば生徒同士の相互評価をしてもよい。

授業中に使用したワークシートや作文だけでなく，録音したテープやビデオテープ，実際に読んだ英文などいろいろなものをファイルするポートフォリオ評価の手法を生かし，生徒個々の学習の成果がわかるようにして，学習意欲を高める工夫もしたい。

5　指導者について

習熟の程度に応じてクラス編制をする場合，最も手がかかるのはやはり基礎コースであろう。当該学年所属だからという理由だけで，あまり経験のない教師が基礎コースを担当し，指導に苦慮するという話を聞く。基礎コースは，生徒の興味・関心を大切にしながらも，class management がしっかりできる経験豊かな教師が担当すべきだろう。

また，speaking の指導は得意だが writing の指導には自信がないなど教師には得意・不得意がある場合がある。それぞれのコースの内容に応じて最もふさわしい教師が指導に当たるようにしたい。

所属する学年全員の生徒を指導することができず，生活指導上支障があるという話も聞く。そういう意味からも，コースを固定せず，流動的なクラス編制をすることが大切ではないだろうか。

6　教材・教具の工夫

ピクチャーカードや CD などは，コースによって指導過程を変え，融通し合ったり，デジタルカメラを利用してピクチャーカードをモニターで投映するなどの工夫ができる。生徒や外国人講師の協力を得て，自作の音声教材やピクチャーカードを制作するのも楽しい試みだろう。

それぞれの教師が作成したワークシート等は是非ファイルして学校の共有財産として残したい。長期休業中にお互いに意見交換をしながらよりよいものを作り上げ，学校独自の活動例集を作ることはできないだろうか。

おわりに

東京都教育委員会が平成 14 年に実施したアンケートでは，小・中学生の保護者の 85％以上が習熟度別授業を「よい（「どちらかと言えばよい」を含む）」と回答しており，生徒の 75％以上が「勉強がわかるようになった（「どちらかと言えばそう思う」を含む）」と答えている。

「打ち合わせの時間が取れない」，「時間割を組むのが大変」，「教材・教具の用意ができない」等々，解決すべき問題が多いのは事実だが，期待が大きく，効果があるのも事実である。1 つのパターンにとらわれることなく，各学校の実情にあった少人数指導を実践していくことが大切である。

特集 多様化する英語の授業

Team-Teachingへの新たな期待

杉本 薫
（東京都中央区立佃中学校）

Team-Teaching と一口に言っても最近は JTE と ALT ばかりでなく，JTE と JTE の日本人教師 2 名によるものも含まれる。それぞれにねらいがあって用意された指導形態なのだが，ここでは外国人講師や指導助手と JTE との Team-Teaching を中心に話を進めたい。しかし，本稿の指摘しようとしている論点においては，どちらの形態であっても，全く同様に考えていいだろう。

さて，興味深いことに，JTE と ALT による Team-Teaching を語る時，指導方法や指導内容についての議論に比べると，評価に言及することはあまり多くない。これは，ALT が assistant であって，評価に関する責任は JTE にあるという考え方が長い間浸透していたことによるものと思われる。

また，ALT の配置には，学期に数時間程度から年間を通じてほぼ常駐という恵まれた地域まで，当然様々な制約があることも共通の認識に立った議論を難しくしてきていたように思う。今思うと，これはむしろ JTE 側に強い傾向だったかもしれない。

以前の教育課程の中なら，配置される時間が少ない場合は，ALT を一時的なゲスト・ティーチャーとして，普段の授業と離れたいわゆる「投げ込み教材的」に活用することも可能であった。「外国の文化的な話題や，ゲーム的な言語活動を特別に取り上げて，外国人の講師と英語を使う楽しい体験」という行き方も珍しくはなかったし，またそれはそれで，その当時においては，意味のある学習であったとも言える。最近なら「総合的な学習の時間」の「国際理解」的なテーマの元にゲスト・ティーチャーを招いて行われている例の方が多いかもしれない。もちろんその場合は英語には全くこだわらないわけだから話は別になる。

しかし，今は違う。いくら配置される時間数が少ないからといっても，週 3 時間の英語の指導計画の中に，このような「投げ込み教材」の割り込む時間を確保することは非常に難しくなっている。授業のカットが全くなく，すべての時間をきちんと授業に当てても，現行の教科書を隅から隅まで完全に終わらせることすら至難の業と言えるのだから。

ならば，Team-Teaching といえども教科書の進度や題材，言語材料等を充分にふまえて指導計画の中に織り込まなければ，我々は非常に簡単に自分の首を絞めてしまうことになる。

ここで，「評価」の話に戻る。声高く「指導と評価の一体化」の大前提を叫ぶまでもなく，このように現教育課程の中の英語の授業における Team-Teaching は，すでに評価そのものにも深く関わらざるを得ない状況にあると言える。そして，この観点は今我々が Team-Teaching に期待することの 1 つである。

ある音読テストの展開から

少人数制による授業編成とは別に，Team-Teaching による指導の形態の工夫として，学級を分割したり，生徒を抽出して個別の指導を行うことも多くなっている。ここで私の実践を一例として紹介したい。

私は，レッスンの終了に合わせて，「音読のテスト」として生徒が一人ずつ ALT の前で教科書のあるページを読み上げさせている。音読だけであれば一人 1 分程度でできるので，だいたい 1 時間で全員に体験させることができる。もちろん他の生徒については同時に私の方で一斉授業を進めている。ただ，授業とはいっても，生徒が順番に抜けていくのだか

ら，普段と全く同じやり方はできない。私の場合は普段できないような writing の指導や関連の小テストなどを行う時間に設定している。

音読テストのねらいは生徒の音読練習量を増やすことと定期的に生徒の力をつかむことにあった。ALT と 1 対 1 という少し緊張を強いる状況下でのテストは英語学習の動機付けと意識を高める効果もあり，全く読めない生徒はほとんどいない。事前に通告するので生徒はかなり練習をしてくるからだ。ここですでにねらいの大部分は達成できている。テストの状況はビデオで撮影しておくので私の方でも点検することもできる。

実は，このテストのもう 1 つのねらいである生徒の音読の力をどのように測っていくか，あるいはどのように育てていくかというところに大きな課題があった。それは，実際に測定する ALT の感覚と私の感覚のすりあわせの方法である。音読そのものに対する考え方から配点と基準の設定までじっくりと時間をかけて話し合っていかないとこの方法は成り立たないのだ。

この音読テストは私の授業の中では ALT と生徒の会話の機会として発展し，最近は「面接テスト」という意味合いが強くなってきた。面接という形式の中で生徒の speaking 能力の進歩を見ることができるのではないかと実践研究中である。

目標を共有する努力

東京都中央区では英語部会の事業として，毎年 8 月にワークショップを実施している。このワークショップはすでに 8 年の歴史があり，昨年は墨田・荒川・葛飾･港･品川･大田･目黒の各区の英語部会が合流して，8 区合同で実施された。

このワークショップの大きな特長は，いくつかの区に ALT を派遣している企業の協力により実際に現場で T-T を行っている ALT・NT（native teacher）が多数参加していることである。そして，これは当初から Team-Teaching のワークショップとして企画され運営されている。当然話し合いはすべて英語で行われる。

さて，ここ数年間このワークショップで議論された話題は，具体的な指導やテストの方法，JTE と NT それぞれがお互いに持っている Team-Teaching への期待と課題，そして “grammar vs communication” といった視点からの授業の見直しなど様々である。これは「評価と Team-Teaching」というまさにこの視点に立った議論であったと言える。

そして，このワークショップの最大のねらいは，ここでの議論を元に，Team-Teaching における 2 人の指導者，JTE と ALT・NT の間で英語学習の目標を共有することにある。言い換えると，いかに同じスタート地点に立つかということである。スタート地点を確認することは，そこからのレースの展開や作戦, そしてゴールの位置も確認することになる。何を目標に，つまり「評価規準」をどこにおくかという議論なくして，Team-Teaching はあり得ない。

授業改善の突破口

生徒数減少に伴う学校内や地区内の英語科教師数の縮小，絶対評価をはじめとする教育改革への対応に追われる中での毎日の忙しさなどの要素は，このような視点からじっくりと授業を見直していくことを非常に難しくしている。その中で Team-Teaching は教師同士の議論を喚起し推進することができる。つまりは，実際の授業改善の突破口としての大きな可能性があると言える。

最後に引用するのは先に紹介したワークショップの企画を手伝ってくれている Ron Martin 氏 (獨協埼玉中学高等学校) が昨年のワークショップの議論を整理した報告書の文頭に書いてくれた言葉だ。これが Team-Teaching の文脈の中で語られる時，授業を改善していく突破口としての Team-Teaching が見えてこないだろうか。

> “Our expectations are not the end. They are not the test. They are the beginning. From our expectations, we should begin our first lesson. Our expectations should be in everything we do. Our students should know all of our expectations. Our expectations should grow — not change.”
>
> — On Expectancy
>
> Ron Martin, Dokkyo Junior High School

特集 多様化する英語の授業

学ぶ喜びを感じる選択授業

―個に応じた言語活動を通して―

関口和弘
（横浜市立大正中学校）

1. はじめに

“Hello，Mr Sekiguchi.”と，目を輝かせながら英語教室に入ってくる生徒を見るたびに，選択授業の大切さを実感する。外国語が必修教科となったことは喜ばしいことである。しかし，授業時数が週3時間となったことは，基礎学力を養う上で，大きな痛手である。実際には，学校行事等で，週3時間の授業でさえ確保できないことも少なくない。そのような中，選択教科としての英語の学習は，教師にとっても生徒にとっても「救いの時間」であると感じている。

選択教科としての外国語においては，生徒の特性等に応じて，多様な学習活動を展開することが求められている。課題学習，コミュニケーション能力の基礎を培う補充的な学習，発展的な学習など，子どもの実態に即した様々な学習内容を各校で工夫していく必要がある。学校の独自性や教師の創造性が問われることになる。

2. 横浜市の動向

横浜市の教育は，「自分で自分の生き方を切り拓いていく子ども」をはぐくむことを目指している。選択教科は，そのために重要な役割の1つを担っていると言える。

昨年度行われた市内中学校へのアンケートによると，選択教科においては，必修教科と同じ評価の観点を設定している学校が多い。そして，必修教科と比べ少人数で授業が展開されている傾向にあり，子どもの興味・関心に応じた授業が工夫されている。現在報告されている選択教科の授業内容は，主に次のように分類することができる。

○語彙や文法事項など，コミュニケーションの基礎となる言語材料のドリル練習を行う。
○教科書での既習事項を活用し，コミュニケーション活動を行う。
○英検などの検定試験に向けての学習に取り組む。
○副教材を活用して，4領域を総合的に学習する。
○特定の領域を重視した学習を行う。（視聴覚機器を利用した「聞く」活動，教科書以外の読み物を「読む」活動など。）

3. 本校の実践例

英語学習に興味を持っている生徒や，英語学習に必要性を見いだしている生徒が英語を選択していることが多い。そのため，生徒の学習意欲は高い。さらに本校においては，8～16名の少人数で授業展開をしているため，正に「個に応じた」授業となっている。授業内容としては，補充的な要素，発展的な要素，課題学習的な要素を，すべて兼ね備えているような学習活動を工夫している。

（1）2学年の例～豊かな表現力を養う授業～

① 全身を使った音読による表現活動

教科書以外の教材を活用して，音読に取り組んでいる。その際，『からだを揺さぶる英語入門』（斎藤孝著，角川書店，2003年）を参考にしている。生徒がすでに *NEW CROWN* で親しんでいる“Humpty Dumpty Sat on a Wall”に始まり，“The Wizard of Oz”“I Have a Dream”“The Gettysburg Address”などの音読に挑戦してきた。容易なものから導入し，徐々に中学生の成長段階に合ったメッセージ性の強い名文に挑戦している。音読練習は，次のような手順で進めている。

CDの模範朗読を聞く→内容を解釈する→教師の

後について，数回リピートする→個人で音読練習をする→グループで円になり，声を合わせて音読する→教室を歩きながら，個人で音読する→各自の音読を発表する→全員で大きな輪を作り，声を合わせて音読する

基本的に，音読練習は立った姿勢で行う。最後は，声の響き合い，心の響き合いを目指す。次は，自己評価表に記入された生徒の感想の一部である。

・歩きながら読むと，楽しくリズムに乗って読める。気持ちも込めやすい。
・全員で音読したとき，皆の声が本当に身体に響いたように感じた。

② 基本表現を活用したスキット

ベストセラーとなっている『ベラベラブック』（ぴあ，2002 年）を活用している。これは，生徒が親しみやすい教材である。場面ごとに短いキーフレーズがカード形式になっている。一方に英語表現，他方にその表現が使われる状況と意味が日本語で書かれている。次のような手順で，毎時間 10 個ずつ表現を覚えるようにしている。

キーフレーズの使用場面と意味を理解する→全体で発音練習をする→個人で覚える→ペアで練習する→全体で確認する→その日の表現を用いたスキットを短時間でつくる→ペアでスキットを発表する→全員がそれぞれのペアにコメントを述べる

生徒は毎回楽しみながらキーフレーズを学んでいる。教室外で会ったときにも，学んだ表現を使ってにこやかに声をかけてくる生徒もいる。

（2）3 学年の例～総合的に基礎力を養う授業～

3 学年の選択授業は，7 ～ 8 名ずつの少人数集団で行っている。座席は，円形にしている。友だち同士の顔が見えることによって，生徒同士に連帯感が生まれ，コミュニケーションへの意欲が向上すると考えているためである。

① インタビュー形式のコミュニケーション活動

教師が毎回テーマを与え，その内容に関して最も大切な情報を 3 文ずつ語る。ここで多くを語らせないことがポイントである。それぞれの生徒に，他の生徒が順番に 1 つずつ質問をしていく。生徒は「何を語るべきか」「何を質問すべきか」を，メモを活用して短時間で判断しなければならない。このような即興性が必要とされる活動に継続的に取り組んでいくことによって，コミュニケーション能力の基礎が養われてくると考えている。

次は，「自己紹介」というテーマを与えたときの展開の一例である。

S1 : I'm Kazuya. I'm a member of the badminton club. I play it every day.
S2 : Is badminton an easy sport?
S1 : No, it isn't. I think it's a hard sport.
S3 : Why do you play badminton?
S1 : Because I like it. It's hard, but fun and exciting. I want to be a good player. ＜以下省略＞

② 4 領域を統合した「補充・発展学習」

副教材として，『英語の楽習 BOOK 2』（正進社）を活用している。このテキストでは，ページごとに生徒が親しみやすいコミュニケーションのトピックが設定されている。また，4 領域を統合した活動を通して，言語材料の復習ができるように工夫されている。さらに，トピックの内容については，debate や discussion などにつなげ，発展性のある扱い方を心掛けている。

4. おわりに

本校では，少人数による選択授業が，生徒個々のコミュニケーション能力の育成に大きく影響を及ぼしていると言える。生徒も毎週の授業を楽しみにしている。今後，授業内容を考えていく際には，「こんなことを学んでみたい」という生徒の要望も積極的に取り入れていきたいと考えている。

またアンケートから，全市的にも，「子どもの選択教科への興味・関心が高まってきている」ことが，成果として報告されている。問題としては，教員数の関係で，生徒の希望に応じるだけのコースを設定することが難しいなどの課題が挙げられている。

今後ますます，選択英語の授業内容に関する情報交換が盛んに行われ，よりよい選択授業の在り方を共に考える機会が増えてくることを期待している。

【参考文献】
○文部省『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説外国語編』東京書籍，1998 年
○横浜市教育センター『平成 14 年度よこはまカリキュラム』2003 年

英語教師のための
基礎講座

「音読から Story Tellingへ」の巻

高梨庸雄　Takanashi Tsuneo
（京都ノートルダム女子大学教授）

1 創造的音読

学習の初期においては正確な音読を心がけることも大事であるが，正確さだけを意識していると音読の楽しさを経験できない。音読に慣れたら「自分の読み方」をしてみることも必要である。音読は題材に対する自分の解釈を表現するパフォーマンスだからである。そこで今回は創造的な音読の仕方を工夫してみよう。

題材として，*NEW CROWN BOOK 2*, LESSON 9, Landmines and Children を用いて具体的な手順を述べることにする。

What is this? It is a danger sign. Signs like this are seen in the forests and fields of Cambodia. What is the danger? Landmines.

These Cambodian children like to play in forests and fields, just like you and me. But some of them are killed and many others are injured. Landmines do this.

1）文章の要点がわかるように数回黙読する。

授業で新出語や文法を含む通常の学習は済んでいるものとする。受動態が初出なので by agent の有無について理解が不十分の生徒もいるかもしれないが，生徒には文法よりもその課の内容理解に集中させる。

2）文章を声に出して数回読みながら，発音に自信のない単語に下線を引く。

黙読の時にも文章が読む生徒にとって難しい場合には，内的音声 (inner speech) と言って，声には出さないが「読んでいる」ことがあり，その時，いまだ自信の持てない語句の発音に気づくことが多い。辞書で確認させる習慣を身に付けさせたいが，生徒が辞書を持ってきていない場合や教室に置いていない場合は，*NEW CROWN* 末尾の「単語の意味」を活用してほしい。あるいは読み方に自信のない単語がどれくらいあるかを確認して，多い場合にはテープや CD あるいは教師の肉声によって音声インプットを行う。

3）自分にとって自然な読み方でポーズを置きたい箇所に斜線（／）を入れる。

生徒が一呼吸で言える文の長さには個人差がある。これは生理的な要因よりも英語と日本語の構造上の相違や音読に慣れていないことが要因となっていることが多い。例えば上記引用文の 3 番目の文である Signs like this are seen in the forests and fields of Cambodia. を一息で言えない生徒も少なくない。その場合，Signs like this と言って標識を見せながら一息ついて，それから文の残りを読み続ける。それでも生徒が長すぎると感じるようであれば，Signs ～ seen までを一息で読ませて，カンボジアの地図や写真を見せながら in the forests and fields of Cambodia. と続ける練習をする。そして最終的には文全体を一気に言えるように指導したい。このように音読は意味のまとまり (sense group) について生徒に考えさせる機会ともなる。

4）文章の中で，自分が音読するときに重要だと思う語句に波線を付ける。

上記 2 つの段落で何が重要な語句かと問われれ

ば，多くの生徒は Landmines と言うだろう。文字通りこの課のキーワードである。次に最初の段落では a danger sign であり，2 番めの段落では killed, injured が関連する重要語となるだろう。このようなキーワードは内容を聞き，読みとる「鍵」となるものである。第 2 段落では，カンボジアの子どもも日本の子どもも森や原っぱで遊びたいものなのだ，と平和な時の子どもの自然な姿を初めに出すことによって，killed や injured とのコントラストが浮かび上がる。

5）波線を付けた語句に集中してイメージをふくらませる。

4）で波線を付けた語句を，直接・間接を問わず自分の経験に関連付けさせる。各自の経験が違うように，語句から浮かぶイメージも同じでなくてもよい。自分の経験に関連付けるのは，自分の理解に“血を通わせる”ためである。自分の経験に関連付けることによって，理解が語彙と文法によって形成される機械的・表面的な理解から自分の中で生きた理解となる。

6）キーワードやその他の重要語句を手がかりに，どんな順序で文章が展開していくのかを記憶にとどめるように数回音読する。

これは単に音読にとどまらず，スピーキングへの転移となって，生徒にスピーキングに対する自信をつけさせる効果がある。これがさらに高まると，Story Telling へ移行することができるようになる。

2 ストリー・テリング

ストリー・テリングを何か上品なパフォーマンスと考えると，多くの生徒はそれだけで気が重くなるだろう。ストリー・テリングは，事実であれフィクションであれ，それを見聞きしたり，読んだりした経験を，だれか他の人と共有するために語ることである。その語りの中からにじみ出る人間の喜怒哀楽の一面が，聞く人々の心を動かすのである。

1）ソフトウエアにない面白さ

現在，テレビ，CD，DVD，ゲーム機と，音声・映像源が巷に溢れているので，よほど強い自制心を持たないと，その洪水に溺れてしまう危険性がある。その点，ストリー・テリングは同じ作品でも語る人によって少しずつ違うという人間的な面白さがあり，これはいつ見聞きしても同じせりふを同じ調子で繰り返す上記のメディアとの大きな相違点である。

最近，コンピュータ用の英語学習ソフトウエアには“インタラクション”を謳い文句にしているものもあるが，それも所詮は人間が考えたプログラムであるから，生身の人間同士のインタラクションとは似て非なるものである。ストリー・テリングを授業の中に上手に取り込めれば，*NEW CROWN* の LET'S TALK に加えて自分たちの LET'S TALK をつくることができる。そこには Interactive software にはない人間の生きた感情がある。

2）対話文もストリー・テリング風に

音声コミュニケーションが重視されるようになってから，教科書に対話文が増えた。それで本当にコミュニケーション能力が向上したのであろうか。対話文が現在ほど多くなかった時代と比べて，対話文の教え方が向上しているのだろうか。

対話文のインプットとアウトプットが増えて，生徒のコミュニケーション能力が向上しているなら大変結構な話である。しかし，教えている教師の実感がそれと違うならば，対話文の教え方で何か足りない点がないかを考えてみる必要がある。

3）本物のインタラクションにする

今回用いた *NEW CROWN BOOK 2*，LESSON 9 では，2 ページにわたって Landmine に関する Ken と Mukami の対話が載っている。この対話では Ken がもっぱら聞き役にまわっている。日本の子どもたちは地雷についての直接的な経験がないから，そういう意味では自然な設定であるが，21 世紀において日本人の果たすべき役割を考えると，この教科書を使っている生徒には，国際貢献について中学生なりの意見を入れて創造的な対話にしてほしい。Ken が最後の台詞で So you mean there're many ways to work for peace, don't you? と言っているのだから，平和への貢献として具体的にどんな行動が中学生に可能か，生徒自身が考えることによって，この対話文が Ken と Mukami の fictional な対話で終わるのではなく，血の通った genuine interaction すなわち，「生きた対話」になる。

Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

「観察」再考

根岸 雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学教授）

1. ＜参考資料＞の功罪

国立教育政策研究所より，『評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）—評価規準，評価方法等の研究開発（報告）—』（以下，＜参考資料＞）が発表されたのは，観点別・絶対評価が導入される直前の昨年２月のことであった。絶対評価の導入に戸惑っていた教師には，貴重な資料となったに違いない。

＜参考資料＞で示されたものは，評価規準（のりじゅん）と言われるもので，そこには評価の視点が示されている。たとえば，「話すこと」の「表現の能力」についての評価規準は，「初歩的な英語を用いて，自分の考えや気持ちなどを正しく話すことができる」と「初歩的な英語を用いて，場面や相手に応じて適切に話すことができる」となっている（下線筆者）。しかしながら，どの段階ではどの程度の「正確さ」や「適切さ」を求めるのかという基準（もとじゅん）は示されておらず，これらは各学校にゆだねられている。

この＜参考資料＞は，後半は評価事例が示されている。英語では，ある授業の１レッスン分を取り上げ，その評価方法を具体的に示している。ところが，この評価事例が大きな混乱をもたらすことになる。毎時間の評価方法等の欄には，それぞれの活動ごとに「活動の観察」「生徒の応答」「録画チェック」と書かれている（「生徒の応答」も「（活動の）観察」により評価するものと思われるが）。これらは，1時間に２～４回行われるようになっている。また，後日，「インタビューテスト」3回および「録画チェック」２回が行われることになっている。

これが示されたことにより，従来のペーパーテストによる評価がふさわしくないような生徒の特性を「観察する」という発想が広まったことはメリットとして考えてよいかもしれない。しかしながら，そのために，多くの教師は「絶対評価」＝「観察」というイメージを持ってしまったのも事実である。公開授業などの指導案を見ると，あらゆる活動の評価に「観察」と書いてあることがある。しかしながら，授業を見ていても，観察を行っている様子は特に見えない。だとすれば，このような形式ばかりの評価計画を書いておいても，意味はないであろう。指導計画の中では，本当に観察する予定のことを書くべきであり，そのほかの指導目標に関わる点については，いつの機会にどのように評価するのかを示すべきである。

では，なぜ＜参考資料＞がこのような誤解を招いてしまったのか。それは，＜参考資料＞の評価実践が，「評価実践例」と「評価事例集」の２つの役割を担ってしまったからではないだろうか。「評価事例集」としては，たくさんの評価事例を載せることに意味があった。しかし，これを実際の授業計画に盛り込む形で，「評価実践例」が示されたために，評価の「過積載」となってしまった。しかも，ペーパーテストなどの役割についての言及がほとんどなされなかったことも混乱を招いた原因かもしれない。評価実践例としては，１レッスンの評価計画の現実的な形をペーパーテストの役割も含めて示し，参考となる評価事例については，評価計画とは別枠で，数多く例示すべきであったと思う。

2. 評価手法としての「観察」の評価

私の知るところでは，英語教育の歴史の中で，これほど評価手法としての「観察」が強調されたこと

はないのではないか。これまでは,「評価」すなわち「テスト」であったかもしれない。しかしながら,＜参考資料＞が示されて以来,振り子は大きく「観察」に振れたのである。

ところが,この評価手法としての「観察」は,テストと比べ,その手法はまったく確立しておらず,そのためのトレーニングも行われていない。たとえば,生徒を観察する場合,どのような活動が観察可能で,どのような活動が観察不可能なのかがわかっていない。また,教師は生徒のことを一度にどのくらい観察できるのかもわかっていない。さらに,いわゆる信頼性の問題もある。作文の採点やスピーキングの採点のときに,あれほど問題となる信頼性であるが,観察においてはこれがなぜかほとんど問題とされていない。何十人もの生徒を観察した場合に,評価結果のぶれがないとは思えない。おそらく,今必要なのは,この観察という手法の特徴を,メリット・デメリットも含めて,冷静に評価することではないだろうか。

3. 音読（発音）の評価

このような状況を踏まえた上で,今回は音読（発音）の評価について考えてみたい。音読の評価というのは,＜参考資料＞でいうところの,「読むこと」の「表現の能力」にあたり,この中には「正確さ」と「適切さ」の規準が入っている。このうちの「正確さ」の評価を行うにあたり,「ペーパーテスト」とそれ以外の方法を比較することで,それぞれの評価方法の特徴を見てみる。

3-1. ペーパーテスト

「ペーパーテスト」による発音の評価は,その高い実用性ゆえか,いまだに多くの定期試験で用いられている。しかし,このテストは生徒に実際に発音させているわけではないために,現実の発音能力を反映していない可能性がある。最近の研究では,とりわけ,中学生などの初学者の場合は,ペーパーテストと実際の発音との関連性の薄いこと,また,強勢問題よりは音素識別問題において,その関連性の薄いことがわかってきている。では,このテストの波及効果はどうであろうか。このテストがあるために,生徒が実際に発音練習をするようであればいいのだが,紙の上でのテストに対しては必ずしも実際の発音練習による対応を期待できないように思われる。

3-2. 観察による評価

次に,教室活動としての音読（発音）を,観察により評価する手法について考えてみよう。この手法は,実際に生徒の発音を聞いている点において,高い妥当性が期待できる。ただ,この場合は,教師がそれぞれの発音に対して,主観的な判断を行わなければならず,この点では,信頼性の問題が出てくる可能性があろう。また,一度に全員の音読を観察できないことから,観察する対象が,毎回異なってしまうという点でも,信頼性に疑問符が打たれるだろう。さらに,実用性はどうであろうか。これはペーパーテストに比べれば,授業中の観察・記録が必要となり,はるかに手間がかかる方法であることは確かであろう。

3-3. MD・テープの提出

これは,家で音読したものをMD・テープに録音して提出させる手法である。これも,実際に発音を聞いているので,妥当性は高いと思われるが,採点における主観が入るために,信頼性は問題となる。しかしながら,教室活動の観察とは異なり,同一のものが読まれるために,この意味では,公平さが保たれている。また,この手法は,採点の手間はかかるが,実施上の（教師の）手間はかからない。おそらく,この手法の最も魅力的な点は,波及効果があるということであろう。というのは,個人で録音するために,生徒は自分で納得するものが録音できたと判断するまで練習する傾向にあるからである。

こうして見てきたように,「音読（発音）の能力」ひとつを評価するといっても,いくつかの手法が考えられ,みなメリット・デメリットがある。したがって,評価計画の作成に当たっては,それぞれの特徴をよく理解して,その中で取捨選択していくべきであろう。

授業レポート CLASS REPORT

教科書を創造的に活用するために[3]

―スキットのすすめ―

野澤重典　Nozawa Shigenori　（長野県更埴市立西中学校）

英語を使えるようにする第一歩は，テキストで学習した表現を使えるようにすることである。これをどんな形で授業に実現させるか，そこに教師のアイディアと創造性が求められる。前稿では，ひとつのレッスンを取り上げ，どのような授業構成を仕組み，生徒の自己表現力を育成するかについて述べた。そこでは，レッスンあるいはセクションの題材内容を活用した「スピーチ」という形で紹介した。本稿では，スピーチと並んでもうひとつ，本校で継続的に実践している「スキット」について紹介する。

① LET'S TALK Series を複合的に組み合わせるスキット

NEW CROWN には LET'S TALK と呼ばれるテキストがある。この Series は是非スキットにして演じさせたい。本校では，すべてのテキストで実践している。それも，いくつかの場面を複合的に組み合わせている。その実践例を紹介したい。

（1）テキストを暗唱する。

スキットで演じるためにもテキストの暗唱は絶対条件である。短いテキストなので，2人または3人のペア・グループをつくり，暗唱する。暗唱ができたペア・グループは教師の前で発表する。その際，イントネーションや簡単なジェスチャーを取り入れるよう指導している。

（2）テキストをちょっと拡大する。

例えば，3年生の LET'S TALK 1 は，「飲み物・食べ物をすすめるとき」の表現が学習ターゲットである。この場面は，「健がムカミに食べ物をすすめる場面」であるが，ムカミが健の家にやってきたことは容易に理解できる。そこで，その場面を次のようなスキットにして発表させてみる。

Mukami :（玄関のベルを押して）Hello, Ken.
Ken : **Oh, hello, Mukami. Come in.**
Mukami : **Thank you.**
Ken : **This is my room. Sit down.**
Mukami : **Thank you.**
Ken : Would you like something to drink?
Mukami : Yes, please. I'd like some tea....
（以下テキスト通り）

太字の部分がテキストを拡大した表現であるが，いずれも1年生での学習表現である。ほとんどの生徒が簡単にできる。テキストの語彙を多少置き換えることも積極的に奨励している。

（3）場面設定をする

（2）を参考に，さらに発展させたスキットに仕上げたい。その時使えるのが，LET'S TALK Series を複合的に組み合わせる方法である。教師はテキストの表現が実際に使われるであろう場面を組み合わせて設定する。例えば，次のような一連の場面設定をする。

①AさんがBさんをお花見に誘う場面
②BさんがAさんの家に来る場面
③AさんがBさんをお母さん（C）に紹介する場面
④お母さんがBさんに食べ物や飲み物をすすめる場面
⑤電話で店員（D）に出前をたのむ場面
⑥お金を払う場面
⑦お花見に出かける場面

この一連の場面設定では，④が本テキストの場面である。ここでは，「誘うとき」「初対面のとき」「場

所を尋ねるとき」「電話で話すとき」「値段を聞くとき」などの機能表現が複合的に用いられ，ひとつの長いスキットとなる。次は生徒の発表原稿である。

（4）生徒のスキット原稿

① AさんがBさんをお花見に誘う場面

B : （電話にでて）Hello.
A : Hello. Can I speak to B-san, please?
B : Speaking.
A : Oh, hello, B-san. This is A. How are you?
B : Oh, hello, A-san. I am fine, thank you. How are you?
A : I am fine too. Thank you.
B : What's up?
A : Are you free today?
B : Yes, but why?
A : We will go to Haruta park to see *sakura*. Would you like to join us?
B : Yes, I'd like to. What time?
A : Please come to my house at 10:30. OK?
B : Yes. See you then. Bye-bye.

② BさんがAさんの家に来る場面

B : （玄関のベルを押す）Hello.
A : Hello. Come in.
B : Thank you.

③ AさんがBさんをお母さん（C）に紹介する場面

A : Mother, this is B-san. B-san, this is my mother.
C : Hello, I am A's mother. Nice to meet you.
B : Nice to meet you too. I am A-san's friend. We are in the same club.
C : Oh, you are also a member of the tennis club! *Yoroshiku-ne*.
B : Yes, A-san is a good tennis player.
C : No, no. You are a good player.
B : No, no, no.

④ お母さんがBさんに食べ物や飲み物をすすめる場面

C : Sit down over there.
B : Thank you.
C : Would you like something to drink?
B : Yes, please.
C : We have some tea, orange juice, milk, coka-cola...
B : I'd like orange juice, please.
C : OK. Wait a minute, please.
B : Thank you.

⑤ 電話で出前をたのむ場面

C : A, it will be lunch time soon. Would you like something to eat?
A : Yes. I want to eat pizzas.
C : OK. Please call ABC Pizza shop.
A : All right... （電話をかける）
D : Hello. This is ABC pizza. Can I help you?
A : Yes, I'd like two pizzas, please.
D : We have cheese, sea food, tomato and mixed pizzas.
A : OK, one cheese pizza and one mixed pizza, please.
D : OK. May I have your name, please?
A : Kato Ichiro. That's my father's name.
D : I see. What time?
A : Please bring them at 12:00.
D : All right. See you then. Thanks a lot.

⑥ お金を払う場面

D : Hello. This is ABC pizza shop.
C : Oh, thank you.
D : Here you are.
C : Thank you. How much?
D : Three thousand yen, please.
C : Thank you very much. Bye-bye.

⑦ お花見に出かける場面

A : Let's eat pizza, and let's go to the Haruta Park.
B : Yes, let's.

このように，生徒たちは設定された場面で起こりうる会話を想像し，複合的に組み合わされたスキットを演じている。生徒はノート等に原稿を書きたがる傾向があるが，それをすると大量の時間がかかる。そこで，配役のみを決定し，なるべく即興的に繰り返し練習しながらストーリーを作成するようにしている。

2. 本課 LESSON を用いたスキット

本校では，LET'S TALK Series のみならず，本課でもスキットを実践している。2～4 課が終了したところで行うので，各学期 1 回程度になる。そして，そのスキットを学校祭で発表している。

生徒は，場面設定を工夫し，ピクチャーカードや CD なども活用し，学習した内容をスキットにして発表している。大事なことはテキストからかけ離れないことである。そのためにピクチャーカードや CD の活用を勧めているのではあるが，この活動の主目的はあくまで学習した表現をたくさん使うことにある。紙面の都合で 2 年 LESSON 9，Landmines and Children の生徒作品のみを紹介する。

※場面設定：地雷について学ぶ英語の授業
※登場人物：教師役（A），生徒役 3 名（B，C，D）

B : Stand up! Let's start our English lesson.
C, D : Yes, let's.
A : Oh, you are very good students.
C : Yes!!
A : Today we will study about landmines.
D : Landmine? What is it?
A : Look.（ピクチャーカードを見せて）This is the picture of the landmines.
B : Huum.
A : Look at this boy.（次のピクチャーカードを見せる）
C : Wow, he is using crutches. What happened?
B : Landmines do this. Some people are injured by landmines.
A : Yes, and many others are killed by landmines.
D : That's terrible, isn't it?
C : Yes, very bad.
D : Is it difficult to remove landmines?
A : What do you think?
B : Difficult.
C : I think so too. Very difficult.
A : Exactly. It is very difficult to remove the landmines. We can't do this!
D : Who can remove the landmines?
B : Specialists.
A : Good. Specialists are needed. They remove the landmines very slowly by hand.
C : That's dangerous work, isn't it?
A : Yes. And we need a lot of money.
D : Money? Oh, I can imagine that.
B : Hey, everyone! Let's make money and help to remove the landmines.
D : Good idea.
C : Great idea.
A : Let's work and get a lot of money.
B, C & D : Yes, let's work! Thank you.

このように，テキストで学習した表現を，スキットの中で使えるようにしたいと願い，すべてのレッスンでスキット化を目指している。

3. まとめ

本校のスキットを参観された先生方から，よく次のような質問を受ける。①全部で何時間かけているのか，②原稿はだれが書くのか，③先生はどの程度指導するのか，④どうやればこんなに生き生きと表現するのか，⑤よく覚えられるね，等々の問いである。答えは大変難しい。結局のところ，場合によって違うので答えようがないというのが正直なところである。むしろ，とにかくやってみようという気持ちでまずやってみること，そして，実践を重ねること，それを大切にしているというのが一番適切な答えかと思われる。スキットの導入は「案ずるより産むが易し」である。

小学校英語 Just Now

コミュニケーションへの態度を育てる！

担任だからこそできる英語活動

大澤 克代　Osawa Katsuyo
（栃木県岩舟町立岩舟小学校）

1. はじめに

私は，内地留学生として宇都宮大学で「英語活動の在り方」を研究し，以来，「担任だからこそできる英語活動」を基本に研究を進めてきました。小学校は中学校のような教科担任制ではなく，学級担任制ですから，登校してから下校するまでの間，教師と児童は常に一緒です。だからこそ，児童一人ひとりの能力や性格，家庭環境などにいたるまでの全人格を把握していると言っても過言ではないでしょう。私は，そんな担任だからこそできる「単に英語力を育てることを目的とせず，積極的にコミュニケーションをとろうとする態度や，友達を認め合う心を育てる英語活動」を目指して日々実践を続けています。

2. 授業の実際

では，実際の授業の様子を２つ，ご紹介します。まず，１つめは「ALT にお任せ」な英語活動からの脱却を目指して行った４年生での単元「英語劇を楽しもう」です。このクラスには劇遊びを好む児童が多かったため，英語の絵本を読み聞かせるだけにとどまらず，英語劇にまで発展させることにしました。劇を通して，「英語に親しむとともに，言葉だけでなく，身振り手振りや表情などを工夫して意思を伝達しようとする態度を育てること」をねらいとしました。

また，学級担任の利点を生かして授業時間だけでなく，朝の会や帰りの会，給食の時間などを利用して，繰り返し繰り返し CD を聞かせることで，子どもたちは無理なくせりふや歌を覚えることができた

４年生　英語劇を楽しもう（全 10 時間）指導案

ねらい	お話を十分に楽しみながら劇化する活動を通して，英語の音やリズム・イントネーションに慣れ親しむと共に，英語及び日本語で表現する喜びを味わう。
国際理解関連	国際社会において必要とされる，相手の立場を尊重しつつ，自分の考えや意思をしっかりと表現できる態度を身に付ける。
英語表現等	Okay. Here it is. / All right. Tea time! / Are you ready? We're ready. / Don't sit there. Sit next to me. On the toolbox. Etc.
単元の過程	1 読み聞かせ（1 時間） ・絵本を英語と日本語で聞く。（CD） ・劇にしてみたい場面を選ぶ。 2 劇活動（8 時間） ・興味のあるところ，演じてみたい場面を英語で劇にする。（劇にできる場面を少しずつ増やしていく。） 3 発表（1 時間） ・劇を「総合・わくわく発表会」で保護者に発表する。

練習風景

発表会

ようです。練習を進めるにあたっては英語嫌いをつくらないよう，あくまでも英語の音やリズム・イントネーションに慣れ親しませ，体を動かし楽しみながら活動することを心がけました。

英語劇の発表を終え，教室に戻った私に向かって1人の女の子が目を輝かせながら聞いてきました。「ああ，楽しかった。先生，次は何の劇をやるの？」このことから，子どもたちがいかに楽しんで英語劇活動をしていたかが分かると思います。

次はボランティア・イングリッシュ・ティーチャー(VET) や ALT との T-T で行った3年生での単元「世界の祭り」です。英語の発話などの場面では VET や ALT にアシストしてもらいながら授業全体は担任が進めていきました。

本単元では，「積極的にコミュニケーションをとろうとする態度を育てること」と，「世界の祭りについて興味を持つこと」を目標にし，毎時間ごとにメイン活動には意図的に目標表現や語彙を使ってのペア活動を組み入れてみました。

実は，このクラスで初めて英語活動の授業でペアを組ませようとしたとき，2人組がつくれなかったのです！ 仲のよい友だちとしかペアになれないその様子をみて，驚いたと同時に悲しくなりました。そして，それまでの授業でいかにこのような形態の活動がなかったかが，容易に推測できました。クラスの中でも偏りのある人間関係しか築けていなかったのだと思います。そこで，以来，できるだけペア活動やグループ活動を体験させるようにしていきました。まるで結婚相手を決めるようにドキドキと相手探しをしていた子どもたちが，ゲームに夢中になることで，次第にどんどんとペアを組めるようになってきました。そして，普段はあまり言葉を交わすことのない人と気軽に“Hello!”と握手することで，クラスの人間関係が円滑になってきたような気がしました。

なかでも，友だちと話すことが苦手だった女の子が「英語をやるようになって，たくさんの友だちと話せるようになってうれしい」と言ってくれたときは英語活動をやってきて本当によかったと思いました。

3年生　世界の祭り（全5時間）指導案

時	形態	ねらい	主な学習活動
1	ALT との T-T	・世界の祭りについて興味を持つ ・文房具についての英語表現に慣れ親しむ。 ・友達と協力しながら進んで活動し，コミュニケーションを図る。	1 祭りの紹介（ALT） 2 復習 3 今週の歌を歌う。 4 Chants リレーゲーム 5 メイン活動 6 クイズ(リスニング) 7 本時を振り返る。
2	VET との T-T	・世界の祭りについて興味を持つ。 ・家族や友達を紹介するための英語表現に慣れ親しむ。 ・友達と協力しながら進んで活動し，コミュニケーションを図る。	1 祭りの紹介（VET） 2 復習 3 今週の歌を歌う。 4 Chants リレーゲーム 5 メイン活動 6 クイズ(リスニング) 7 本時を振り返る
3	VET との T-T	・世界の祭りについて興味を持つ。	1 祭りの紹介（ALT） 2 復習

もちろん，ペア活動がスムーズに進んだのは，チャンツや歌を1日に何度も繰り返し聞かせることで，目標表現や語彙がどの子にも十分にインプットされていたからだということは言うまでもありません。

3. おわりに

私は今春に異動して，現在6年生を担任していますが，6年生ともなると間違いを恐れたり，人前で英語を話すことに妙なてれを感じてしまったりする気持ちが強くなってきているのがわかります。中学生ともなればなおさらでしょう。だからこそ，小学校で「英語に慣れ親しむとともに進んでだれとでもコミュニケーションをとろうという態度を身に付ける」ことが必要なのだと思います。小学校で中学校の前倒しでない英語活動の体験があれば当然中学校での「英語科」が変わってくるはずでしょう。ひいては「英語が使える日本人」へとつながっていくのではないでしょうか。

Intercultural communicative competence [3]

Lynne Parmenter
(Associate Professor, Waseda University)

Introduction
The aim of this series of three articles is to explore in greater depth one of the most common rationales given for teaching and learning English in schools; in order to communicate with people of other cultures. In the first two articles, the elements of Intercultural Communicative Competence (ICC) —knowledge, skills, attitudes and critical cultural awareness—were introduced and described. In this final article, I would like to consider the possibilities for applying ICC to the foreign language classroom in Japan.

Whose responsibility?
The first question to ask is who should take responsibility for implementing ICC in the classroom. The easiest and most effective way is for the policy-makers (i.e. Monbukagakusho in Japan) to incorporate an ICC framework into foreign language education and curriculum. This is what is happening in many European countries, but it appears unlikely to happen in Japan in the near future, and so will not be considered in the limited space of this article. The next possibility is for textbook writers to incorporate an ICC framework into the textbooks. At present, none of the textbook series seem to have a structured or coherent framework for cultural content, but most textbooks (some more than others) include elements of ICC, and this can be useful material. The greatest possibility for developing ICC lies with individual teachers. With a little thought and effort, teachers can do a great deal to develop intercultural knowledge, skills, attitudes and critical cultural awareness within the bounds of the present policy, curriculum and philosophy of English education in Japan.

But how?
Obviously, the next question is how to implement ICC. Taking into consideration all the other demands made of English teachers (covering the syllabus, preparing for entrance exams, non-subject responsibilities, etc., etc.), the most practical and realistic option would seem to be the 'plus alpha' route. In other words, rather than radical change, English teachers could spend just a few minutes before each lesson thinking about how intercultural knowledge, skills, attitudes and/or critical cultural awareness could be developed in that lesson. For example, imagine that the aim of a 1st year class is to study part of the textbook which includes the key sentence, "Do you play tennis?——Yes, I do. / No, I do not." Using the 'plus alpha' approach, students could brainstorm sports in English (developing linguistic skills). With the help of the teacher/ALT, they then find out which sports are played in which countries (e.g. baseball is not played in Europe, soccer is popular in South America but not in the US) (developing cultural knowledge). They then take the role of people from various countries and play a communicative game, practicing the key sentence and variants (linguistic and communicative skills). Finally, a few minutes could be spent discussing why baseball is popular in Japan and South Korea, while cricket is more popular in India and Australia (critical cultural awareness). Such extension activities can be incorporated into almost every chapter of the textbook, although some texts obviously lend themselves more easily to cultural activities than others.

Conclusion
The implementation of ICC into the classroom at the level described in this article does not require a radical paradigm shift. Most teachers probably already do the kinds of activities described above, using the textbook as a base from which to expand students' cultural horizons. For teachers who want to incorporate ICC into their English classes, the cumulative effect of 'adding in' a cultural aspect to every class (the 'plus alpha' approach), combined with a constant view of the overall concept and aims of ICC, will reap benefits to the students not only in terms of intercultural competence, but also in terms of communicative ability and motivation to learn English.

I would be very happy to hear teachers' opinions about comments made in this series of articles. Please e-mail: lynne@waseda.jp

TEACHING ENGLISH NOW 通信

お知らせ

FIRST CROWN 指導用セット ―国際理解の視点をはぐくむ小学校英語活動用教材―

Hello! Ciao! Jambo! ...

小学校英語活動用の教材『FIRST CROWN 指導用セット』の中心教材であるビデオ「Global Kids Classroom」の各ユニットのオープニングです。各国から集まった子どもたちが，視聴者に向かってそれぞれのお国ことばであいさつをします。

子どもたちが登校するインターナショナルスクール Global Kids Classroom（地球子ども教室）は，20XX 年の宇宙ステーションの中。彼らは国際プロジェクトのため，世界各国から集まった人々の子どもたち。この風変わりな場面設定は，それぞれの文化を背負った子どもたちが集うニュートラルな場で，地球を客観視して地球市民としての意識を芽生えさせたいという願いからです。

また，このビデオの各ユニットは，セクション１が身近な題材で言語材料の導入，セクション２が同じ言語材料を使って国際理解の内容を扱う２段構えの構造になっており，このセクション２が本教材の大きな特徴になっています。たとえば，ユニット１では英語圏以外の様々な国の人たちとの出会い，ユニット４ではネパールの学校，ユニット７では希少種の動物，ユニット９では中国のお正月，という具合に多彩な映像を GKC の子どもたちと一緒に見て学んでいく仕掛けになっています。世界のさまざまなことばの音声を聞き，いろいろな生活や文化の映像を見て，子どもたちは，その多様性に気づくはずです。

FIRST CROWN 指導用セット

指導用ビデオ Step1
指導用ビデオ Step2
指導用ピクチャーカード
指導用ウォールチャート
指導用 CD
本体価格 73,500 円＋税
（分売もしています。詳しくは http://www.sanseido.co.jp/ をご覧ください。）

ストーリーは全編が英語で進められていきます。例えばユニット３では，GKC のお助け宇宙人キャラクターのピコとココが，紙でつくった鉢，木，星を次々とつなぎ合わせてつくったクリスマスツリーを当てるクイズをする場面があります。その過程で“What's this?”“It's ～ .”というやり取りが他のフレーズも交えながら繰り返し出てきます。子どもたちは楽しく見ていると同時に英語の音を聞いて，自然に英語の意味に気づいていきます。また，教材もそうした気づきを促すように仕組んであります。

もちろん子どもたちは全部わかるはずもありません。しかし，わかる必要もないと思います。小学校段階では，英語をたっぷり聞いて，英語のままなんとなく理解する体験をすること，わからなくてもあまり気にしないという態度を養うこと，英語の音に親しむということがクリアできていれば十分だと思います。それだけでも中学校で本格的に英語を学ぶ助けになるはずです。

ネイティブの英語が提供でき，多彩な映像が提供できるのがビデオの利点。準拠のピクチャーカードやウォールチャートなどを使いつつ，楽しくてためになる小学校の英語活動を展開していただければと思っております。

小学英語編集部

研究会・セミナー情報

■語学教育研究所　80 周年記念　2003 年度研究大会
日　時：10月25日（土）10:00～17:00・26日（日）10:00～15:40
場　所：神奈川大学（横浜キャンパス）
内　容：（25 日）講演「パーマーと現代の英語教育」新里眞男（富山大学），協議会，公開授業1(中 2)，創立 80 周年祝賀会ほか。（26 日）協議会，公開授業2(英語)ほか。
参加費：5,000円，学生1,000円
お問い合せ：語研事務局　TEL. 03-3818-9648 ／ FAX. 03-3818-9885
URL：http://www.irlt.or.jp/

■第 53 回　全英連東京大会
日　時：11 月 28 日（金）10:10 ～ 17:15・29 日（土）9:30 ～ 16:00
場　所：（28 日）大田区民ホール「アプリコ」，（29 日）国立オリンピック記念青少年総合センター
内　容：（28 日）講演‘Trusting Our English: Letting Learners Learn’ Jane Willis（英国 Asto University），中学校・高校授業実演，授業合評会ほか。（29 日）分科会午前の部・午後の部，教材展示，業者プレゼンテーション，ワークショップ・セミナー
参加費：6,000 円　**ホームページ**：http://www.zen-ei-ren.com/53tokyo.htm

TEACHING ENGLISH NOW
3 号
2003 年 9 月 25 日発行
定価 80 円（本体 76 円）

編集・発行人：佐伯　勇
発行所：株式会社三省堂
〒101-8371　東京都千代田区三崎町 2-22-14
電話（03）3230-9422（編集）
振替　東京 00160-5-54300
［NEW CROWN ホームページ］
http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html
印刷：三省堂印刷株式会社
〒192-0032　東京都八王子市石川町 2951-9
電話（0426）45-6111（代）

編集後記

今号から根岸雅史先生による新連載「評価クリニック」が始まりました。観点別・絶対評価に関して先生方が抱かれている疑問や課題を編集部（newcrown@sanseido-publ.co.jp）までお寄せください。この連載で取り上げていく予定でおります。

デザイン：牧野剛士（株式会社マキノプロダクション）・橋本竜志

三省堂 NEW CROWN 指導用教材

分売もしています!

ビデオソフト❶❷❸

VHS／各巻シナリオ付き

教科書完全準拠で，すべてのレッスン，LET'S TALK，LET'S READ*を映像化！

3年 LET'S READ 2 を除く

本課（レッスン）部分

本課（レッスン）の構成は，① 教科書本文の場面や内容をわかりやすく映像化（ドラマ化）して提示する部分と，②ドキュメンタリー構成で題材背景の理解を深める部分，の二部構成になっています。題材背景の映像は，世界各地のロケを敢行し，興味・関心を喚起する新鮮な映像を提供します。

① 本課　スキット

教科書本文の前後にスキットを追加し，より自然な場面として映像化しています。

② 本課　ドキュメンタリー

題材背景のドキュメンタリー映像では英文のナレーション音声で解説しています。

LET'S TALK部分

LET'S TALK はタスク方式を取り入れ，映像を見ながら会話練習ができるようになっています。

会話の前後を補充してありますので，より自然な流れで会話練習できます。

ポイントとなる表現が映像を見ながら繰り返し練習できます。

●各VHS1本（約5〜10分）本体7,000円＋税　●学年セット1･2年（14巻セット）本体85,000円＋税／3年（12巻セット）75,000円＋税

■1年（全14巻）

① 英語であいさつしてみよう，LET'S START 1〜3
② LESSON 1　My Name is Kato Ken
③ LESSON 2　What Is This?
④ LESSON 3　You Are a Good Singer
⑤ LESSON 4　I Am a Champion
⑥ LESSON 5　Alice and Humpty
⑦ LESSON 6　School in the USA
⑧ LESSON 7　Chinese and Japanese
⑨ LESSON 8　They Are Partners
⑩ LET'S READ 1　We Are Together
　LET'S READ 2　A Miller and a King
⑪ LESSON 9　A Letter from England
⑫ LET'S TALK 1〜3
⑬ LET'S TALK 4〜5
⑭ LET'S TALK 6〜7

■2年（全14巻）

① LESSON 1　Bob's Stay in Japan
② LESSON 2　Mukami's Three Languages
③ LESSON 3　Student Reports
④ LESSON 4　Kumi Talks about Korea
⑤ LET'S READ 1　A Trip to Mongolia
⑥ LESSON 5　The United Kingdom
⑦ LESSON 6　Speech—'My Dream'
⑧ LESSON 7　Ainu
⑨ LESSON 8　Computer Communication
⑩ LET'S READ 2　The Song of the Whales
⑪ LESSON 9　Landmines and Children
⑫ LET'S TALK 1〜3
⑬ LET'S TALK 4〜5
⑭ LET'S TALK 6〜7

■3年（全12巻）

① LESSON 1　Tom's Tricks
② LESSON 2　Interview with Mr Clark
③ LESSON 3　Hiroshima and Nagasaki
④ LESSON 4　Save the Earth
⑤ LET'S READ 1　Hikoichi's Living Umbrella
⑥ LESSON 5　Show and Tell
⑦ LESSON 6　I Have a Dream
⑧ LESSON 7　A Vulture and a Child
⑨ LESSON 8　Without Barriers
⑩ LET'S READ 3　Language—Life of A People
⑪ LET'S TALK 1〜3
⑫ LET'S TALK 4〜5

新刊案内

三省堂 編

折り鶴に出会った子どもたち
―平和を祈るエッセイ100編―
音楽CD付き

1,800円　四六変型判　240頁

広島の「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さん。禎子さんと折鶴のエピソードに心動かされた中高生から「平和創造のエッセイ」が寄せられた。3,000以上の応募作品から秀作100編を編み，那須正幹・あまんきみこ両氏の特別寄稿も掲載。CDにはモンゴル人歌手オユンナの『ヒロシマの折鶴』と『風の色』を収録。

斎藤栄二 著

基礎学力をつける英語の授業

2,200円　四六判　272頁

明日の授業から使える実践例が満載!!

2002年度から中学校で新学習指導要領が実施され，英語が週3時間になった。「基礎学力とはなにか」が重要な課題となっている。本書は悩んでいる現場教師のために具体的な授業例を，対話形式で指針を示している。

渡邉時夫 監修
酒井英樹・塩川春彦・浦野研 編

英語が使える日本人の育成

1,900円　A5判　332頁

英語教育を刷新するための7つの指針

教師の英語使用能力を高め，学習者が生きた英語から直接学びとることを可能にする理論と方法を，小学校から大学までの豊富な実践例を通してわかりやすく説く。

辞　書

B6変型判　（カラーページ英和32頁・和英16頁）

田島 伸悟・
三省堂編修所　編

初級クラウン

英和1,600円／
英和CD付き1,700円／
和英1,600円／
合本（英和・和英）
CD付き3,000円

中学生にぴったり！楽しい！よくわかる！

教科書や新学習指導要領を踏まえ，日常学習と高校入試に十分な13,000語（英和）を収録。日常英会話などの豊富な用例，「まちがえやすい英文法」などのコラム，イラストを大幅に増やす。カラーページで「場面別」の会話例と世界の文化を，中学生の目で紹介。

井上永幸・赤野一郎　編

ウィズダム英和辞典

3,100円　B6変型判　2,368頁

英語の現在を映し出す最先端の次世代型英和！

独自のコーパスを全面的に活用した初の英和辞典。項目選定，語義解説，用例，語法解説などすべてが英語の実例分析に裏打ちされた詳細で生きた情報。最先端の語法情報で，コミュニケーションにすぐ使える発信型辞書。総収録項目数約9万2千。

下 薫・三省堂編修所　編

キッズクラウン英和辞典

1,900円　A5判　304頁（12cmCD 1枚付き）

目から，耳から，英語が身につく，新しい小学英和辞典！

「聞く」「話す」能力が重視される新しい英語教育に対応した小学英和辞典。収録語数2,400語以上。オールカラーのイラストとともに，会話や歌など豊富なCD音源も備え，楽しみながら自然に英語を覚えられる。

（表示価格は税別）

三省堂 Web Dictionary
sanseido. net
http://www.sanseido.net/

国内最大級のWeb辞書検索サイト
オンライン辞書検索サービスの決定版!!!

無料で使える辞書も搭載!

三省堂Web Dictionaryはインターネットに接続すればいつでもどこでも使えるオンライン辞書の決定版。17タイトル，170万語の見出し語が自在に検索可能。多彩で豊富なメニュー。Webの特性を生かした，複数辞書同時検索とデータの随時更新を実現。

■お問い合わせ：三省堂Web Dictionary事務局　TEL. 03-3230-9416 / FAX. 03-3230-9580　■ご利用料金（個人会員用）　年間：3,000円　6カ月：1,500円

三省堂
http://www.sanseido.co.jp/

□本　社　〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14　TEL. 03（3230）9411（編集案内）・9551（営業）
TEL. 03（3230）9422（英語教科書編集部）
□大阪支社　〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3　TEL. 06（6341）2177
□名古屋支社　〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル4F　TEL. 052（252）9211・9212
□九州支社　〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1　TEL. 092（531）1531・1532
□札幌営業所　〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ノヴァ15ビル2F　TEL. 011（616）8722